
一人にしないで

なんじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一人にしないで

【Nコード】

N4985B

【作者名】

なんじ

【あらすじ】

トロピカルマリナランドでのデートが事件捜査となってしまった埋め合わせに高木佐藤の二人は東京ドームへ野球観戦へと向かう。そこで知る佐藤の意外な横顔とは。

(前書き)

2002年09月の作品。

このお話がサンデーに載った頃は、まだジャイアンツには松井がいて、優勝したんですよ。

ということを念頭においてお読み下さい。

今となっては遠い過去です。

元太を、小嶋酒店へ送っていくと、家の中からテレビの音が聞こえた。

「さあ、今日は、両チームどうした事か！

投手の大乱打！乱打線です。この時刻でまだ5回裏。

13対13。白熱した試合です！」

佐藤を自宅に送ろうとする高木に佐藤は言った。

「ね、高木君。東京ドームのチケットまだ持ってる？

あ、持ってるのね、じゃあ今からドームへ行きましょうよ。

デートは事件で慌しすぎたし、

試合のテンポが遅いみたいだからまだ、充分観戦できそうよ」

高木の頭からは、白鳥警部との飲み会の約束はすっかり抜け落ちた。

「高木君、じゃあ、ちょっとわたしのうちによって。荷物があるから」

佐藤は自宅に戻ると、大きなバッグを肩にかけた。

“なんだろう・・・まさか指輪・・・ってことはないよなあ・・・”

すっかり笑顔の戻った佐藤を見てほっとしながら、高木は考えた。

ドームに着き、化粧室に行った佐藤を高木は、胸躍らせて待った。

そして、

「佐藤さん・・・その格好は・・・」

(以下は、読者の好みによって、Caseをお選び下さい)

Case1. オレンジの中の黄色と黒

「いっけえ！アリアス！ホームラン！！やったああ！！」

黄色と黒のタイガースカラーのハチマキ、ハッピー、に身を包み、メガホンを持った佐藤は立ち上がり叫んだ。

オレンジ色の集団の中で、高木は身が縮む思いだった。

“佐藤さんに振られた時は、思いつき巨人を応援して、すべてを忘れようと思ってこの席にしたんだけど・・・”

まさか佐藤さんがタイガースファンだったなんて”

オレンジのハッピーの、屈強な男が佐藤に近づいた。

高木は佐藤をかばうように立ち上がった。

「オウ、姉ちゃん、阪神ファンか」

「そうよ、別に、ここで阪神を応援しちゃダメって法律でもあるの？」

“佐藤さ〜ん、警察官が、相手を挑発しちゃあダメですよ”

高木は、あせった。

と男はにっこり笑った。

「まあ、優勝も決まった事だし、

姉ちゃん一人じゃ寂し카ろう、

おい、お前らも今日は阪神を応援せい！」

男の周りの数十人が立ち上がり、タイガースを応援し始めた。

佐藤も高木の事など忘れたように応援に熱中した。

「おい、兄ちゃんも応援せいかい！」

座り込んだままの高木は男に怒鳴られてしまった。

Case 2. 黄色と黒の中のオレンジ

「いっけえ！松井！ホームラン！！やったああ！！」

オレンジ色のジャイアンツカラーのハチマキ、ハッピー、に身を包み、メガホンを持った佐藤は立ち上がり叫んだ。

黄色と黒の集団の中で、高木は身が縮む思いだった。

“佐藤さんに振られた時は、思いつき阪神を応援して、すべてを忘れようと思ってこの席にしたんだけど・・・”

まさか佐藤さんがジャイアンツファンだったなんて”

黄色と黒のハッピーの、屈強な男が佐藤に近づいた。

高木は佐藤をかばうように立ち上がった。

「姉ちゃん、ええ度胸やなあ」

「そうよ、別に、ここで巨人を応援しちゃダメって法律でもあるの？」

“ 佐藤さくん、警察官が、相手を挑発しちゃダメですよ”

高木は、あせった。

男はにやりと笑った。

「たいていの自称巨人ファンはこれでこそそそ逃げよる。

ただよう勝つからて、巨人ファンを名乗って、

ただ尻馬に乗って応援しとるばかりの、根性無しが多いからのう。

姉ちゃんは、違うな。性根の座った巨人ファンや」

「親の代からよ」

男は、からからと笑った。

「なら、3代続いた、阪神ファン家族を持つ、

猛虎会会員のワシがあんたにエールを送ったる。

よし、みんなこの姉ちゃん・なんて名や？」

「佐藤よ」

「佐藤さん、な。よっし、それ、かっせかっせ佐藤！かっせかっせ佐藤！」

総立ちのエールの中高木は一人座り込んでいた。

“ 佐藤さん、猛虎会の人達と心通わせてどうするんですかあゝ”

Case 1. 2の共通の続き

総立ちの観客に囲まれながら、高木は心の中で叫んでいた。

“ 佐藤さくん、僕を一人にしないで下さいよゝ”

うつむいてへたれていた高木は、自分の頭上に迫り来る脅威に気がつかなかった。

「高木君！！危ない！！！」

佐藤の悲鳴に、高木は思わず顔を挙げた。

そこに、ホームランボールが直撃した。

翌日登庁した高木は、強面の刑事たちに取り囲まれた。

白鳥警部が無言でスポーツ新聞を高木に突きつける。

そこには、「ホームランボール、観戦中の公務員の顔面直撃」の見出しが躍っていた。

鼻に大きなバンソウコウをつけた高木は、

飲み会の約束不履行、

警察官にあるまじき反射神経の鈍さ、

及び、負傷後、誰にどのような看護を受けたかについて、

取調室で、実に厳しい尋問と追求を受ける事になったのであった。

（後書き）

載せていただいたサイトの管理人さんのために
二部構成と致しました。

高木刑事は野球が好きそうですが
佐藤刑事はどうなのでしょう？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4985b/>

一人にしないで

2010年12月18日14時10分発行